

錢形平次捕物控

笑ひ茸

野村胡堂

青空文庫

一

伽羅大盡磯屋貫兵衛の涼み船は、隅田川を漕ぎ上つて、白鬚しらひげの少し上、川幅の廣いところを選よつて、中流に碇いかりをおろしました。わざと氣取つた小型の屋形船の中は、念入りに酒が廻つて、この時もうハチ切れさうな騒ぎです。

「さア、皆んな見てくれ、こいつは七平の一世一代だ——おりん姐さん、鳴物なりものを頼むぜ」

笑ひ上戸じやうごの七平は、尻しりを端折ると、手拭をすつと冠りに四十男の恥はぢも外聞もなく踊り狂ふのでした。

取巻の清五郎は、藝者のお袖を相手に、引つきりなしに拳^{けん}を打つて居りました。貫兵衛の義弟で一番若い菊次郎は、それを面白いやうな苦々しいやうな、形容のしやうのない顔をして眺めて居ります。

伽羅大盡の貫兵衛は、薄^{うす}菊石^{あばた}の醜^{みにく}い顔を歪^{ゆが}めて、腹の底から一座の空氣を享^{きやう}樂^{らく}して居る様子でした。三十五といふ、脂^{あぶら}の乗り切つた男盛りを、親讓りの金があり過ぎて、呉服^{ごふく}太^ふ物問屋の商賣にも身が入らず、取巻末社を引つれて、江戸中の盛り場を、この十年間飽きもせず^{あき}に押し廻つて居る典型的なお大盡です。

「卯八、あの酒を持つて來い」

大盡の貫兵衛が手を舉げると、

「へエ——」

爺やの卯八——その夜のお燗番かんばん——は、その頃は飛切り珍しかつたギヤーマンの徳利とくりを捧げて、臙ともから現はれました。

「さて皆の衆、聽いてくれ」

貫兵衛は徳利を爺やから受取つて、物々しく見榮みえを切ります。

「やんやく、お大盡のお言葉だ。皆んな静かにせい」

清五郎は眞つ赤な顔を擧げて、七平の踊とおりんの三味線を止めました。

「この中には、和蘭渡おらんだわたりの赤酒せきしゆがある。ほんの少しばかりだが、その味の良さといふものは、本當にこれこそ天の美祿といふものだらう。ほんの一杯づつだが、皆んなにわけて進ぜ度い。さ

ア、年としがしら頭の七平から」

貫兵衛はさう言ひ乍ら、同じギヤーマンの腰こしだかさかづき高盃を取つて、取巻の七平に差すのでした。

「有難いツ、伽羅大盡きやらの果報にあやかつてそれでは頂戴仕るとしませうか、——おつと散ります、散ります」

野幫間のだいこを家業のやうにして居る巴屋ともゑや七平は、血のやうな赤酒を注がせて、少し光澤つやのよくなつた額ひたひを、ピタピタと叩くのです。

「次は清五郎」

これは主人と同年輩の三十五六ですが、雑俳ざつばいも、小唄も、噓八百も、仕方しかたばなし嘶も、音曲もいける天才的な道楽指南番で、七平おとに劣らず伽羅大盡に喰ひ下がつて居ります。

「へエ——オランダ渡りの葡萄酒ぶだうの酒。話には聞いたが、呑むのは

初めて——それでは頂戴いたします、へエ——」

美しいお蔭つたにお酌しやくをさせて、ビードロの盃くちびるになみくくと注いだ赤酒。唇まで持つて行つて、フト下へ置きました。

「何うした、清五郎」

少し不機嫌な聲で、貫兵衛はとがめます。

「いえ、少し氣になることが御座います」

「何んだ」

「あれを——氣が付きませんか、橋場はしばのあたりでせう。闇の中に

尾を引いて、人魄ひとだまが飛びましたよ」

「あれツ」

女三人は思はず悲鳴をあげました。

「おどかしてはいけない、多分四つ手駕籠の提ちやうちん灯か何んかだらう」

と貫兵衛。

「そんな事かもわかりません、——あゝ結構なお酒でございました、——もう一杯頂戴いたしませうか」

清五郎は綺麗に呑み干した盃を、お薦の前に突き付けるのです。

「それはいけない、酒にも人数にも限りがある。その次は菊次郎だ」

「さう仰しやらずにもう一杯、——頬つぺたが落ちさうですよ」
「いや、重ねてはいけない、それ」

貫兵衛が目配^{めくば}せすると、お薦は清五郎の手から盃をさらつて、菊次郎のところへ持つて行きました。貫兵衛の義理の弟で三十前後、これは苦み走つたなか／＼良い男です。

菊次郎もどうやら一杯呑みました。義兄が祕藏^{ひざう}の赤酒は、こんな時でもなければ口に入りさうもありません。

續いて藝者のおりんとお袖、お薦^{つた}は呑む眞似だけ。大方空^{から}つぽになつた徳利は、杯を添^{とも}へて臚^{かん}のお燗^{ばん}番のところに返されました。

「あ、お前は」

お爛番の卯八は飛付きました。が、その徳利を奪ひ取る前に、船頭の三吉は徳利の口を自分の口に當てて、少しばかり残つて居た赤洒を、雫も残さず呑み干してしまつたのです。

「宜いつてことよ、今日は大役があるんだ。酒でも呑まなきや、仕事が出来るものか」

「でも、その酒を呑んぢやいけないことがあつたんだ。仕様がねえなア」

「ケチケチ言ひなさんなよ、酒の一本や二本、何んでえ」

船頭の三吉は、お爛番の卯八の文句に取合ふ様子もありません。それから騒ぎが、どんなに悪魔的なものであつたか、たつた

一人素面しらふだつた、若い藝者のお薦すすめだけがよく知つて居ります。

一番先に狂きやうたい態えんを演じたのは、江崎屋えざきやの清五郎でした。

「ウ、ハツハツハツ、ハツ、ハツ、ハツ、こりや可笑をかしい、ハツハツハツ、ハツ」

腹を抱へて笑ひ出すと、その洞うつろな笑ひが、水を渡り闇を縫つて、ケラケラケラと川面一パイに擴ひろがつて行きました。

それをきつかけのやうに、暫くの間坐つたまゝ、顔の筋肉をムズムズ動かして居た巴屋の七平は、物に憑つかれたやうに起き上がつて、筋も節もなく踊りをど始めたのです。

續いて菊次郎——日頃賢かしこさうに取澄してゐるのが、膳を二三枚蹴飛けとばすと、湧き上がるやうな怪奇な手振りで、ヒヨロリ、ヒヨロ

りと人の間を泳ぎ廻るのです。

年増藝者のおりんは、何やらわめき散らして、狭い船の中——杯盤の間を滅茶々に轉げ廻りました。日頃氣取つてばかり居る中年増のお袖も、譯のわからぬ事を歌ひ續け乍ら、あられもないもろはだぬぎ双肌脱になつて、尻尾に火の付いた獸けもののやうに、船の中を飛び廻ります。

その中でも一番猛烈を極めたのは、船頭の三吉でした。口から泡を吹いて、酔眼すめがんをビードロのやうに据ゑたまゝ、野猪のじしのやうに、艫ともから舳みよしへ、舳から艫へと、亂れ騒ぐ人間を掻きわけて飛び廻ります。

鎮しづまり返つた隅田川の夜氣を亂して、船の中には、一瞬しゆん氣違ひ

染みた旋風せんぷうが捲き起つたのです。洞ろな笑ひと、譯の解らぬ絶叫と、滅茶々々にもつれ合ふ中を、七人の男女が狂態の限りを盡すのでした。

一番若くて、一番綺麗なお蔦つたは、颱風の眼のやうに移動する動亂うづの渦うづを避けて、お爛番かんばんの卯八の懷に飛込んだり、伽羅大盡きやらの貫兵衛の背後うしろに隠れたりしました。船は丁度隅田川の眞中に停つたまゝ、一寸も動く様子はありません。この動亂を避ける道は、夜の水より外には無いのですが、水心の無いお蔦はさすがに其處へ飛込むほどの勇氣も無かつたのでせう。

「旦那、どうしたんでせう、私は、私は怖い」
こは

日頃は醜い蝦蟆がまかなんかのやうに思つてゐた貫兵衛も、今の場

合では、たつた一人の救ひの神でした。殆んど素面しらふで、艫ともからこの狂態をヂツと見詰めて居る貫兵衛の冷たい顔には不氣味なうちにも、妙に自信らしいものがあつたのです。

「怖こはがることはないよ、あいつらは騒ぐことが好きなんだ、——あんなにゲラゲラ笑ひ乍ら、滅茶々に踊り狂ひ乍ら、地獄の底まで道中するんだ」

貫兵衛の醜い顔は、惡魔的な冷笑に歪ゆがんで、七人の狂態を指した手は、激情に顫ふるへます。

「助けてエー、旦那様」

お蔭は思はずがり付いた袂たもとを離しました。冷靜を裝ふ貫兵衛の顔には、踊り狂ふ七人の顔よりも物凄いものがあつたのです。

その騒ぎの中から、船頭の三吉はヒヨロヒヨロと艫ともに戻りました。

「退どいてくれ、——俺は、大變なことを忘れてゐた」

片手業にお爛番かんばんの卯八うをかき退けると、豫かねて用意したらしい、木槌こづちを取つて、船底の栓せんを横なぐりに叩くのです。

「あッ」

お爛番の卯八は後ろから、その身體を羽搔はがいじ締じめにしました。此處で船底の栓などを抜かれたら、船の中の十人は、一とたまりもなく溺おほれ死ぬことでせう。

「止してくれ、——邪魔しやがると、手前てめえのガン首から先に抜くぞ」

いきり立つ三吉。

「頼むからそいつは止してくれ」

「何を言やがる」

振りもぎつた三吉、もう一度槌つちは勢ひよく振りあげられます。

その争ひは一瞬にして片付きました。船頭の三吉が豫て仕掛けをしてあつたらしく、船底の栓が他愛たわいもなく抜けるのと、卯八の必死の力が、荒れ狂ふ三吉を舷ふなばたから川の中へ押し轉がすのと、殆んど一緒だつたのです。

ドツと奔騰ほんとうする水。

「あツ」

卯八は今抜き捨てた栓を捜しましたが、咄嗟とつさの間に三吉が川の

中へ抛り込んだものか、それは見當りません。自分の身體を持つて行つて、穴から奔注する水を防ぎましたが、そんな事では、何んの役にも立たないことが、すぐ解つてしまひました。船の中の狂亂は、一瞬毎にその旋回度を増して、山水に空廻りする水車のやうな勢ひ。

「あツ、さうだ」

卯八は料理のため用意した出刃庖丁を取出すと、碇綱をブツリと切りました。あとは、艀に寄つて、馴れない乍ら一と押し、二た押し。

水浸しになつた涼み船は、それでも白鬚の方へ、少しづつ少しづつは動いて行きます。

時々ドツとあがる笑ひ聲、それも次第に納まつて、亂舞も大方
凧ないだ頃、船は向島の土手の下、三間ほどのところへズブズブと
沈んでしまひました。

三

魂たましひの抜けたやうに、呆然ぼうぜんとしてゐる貫兵衛うながを促し、か弱い乍
ら、一番氣の確たしかなお蔭つたを手傳はせて、卯八一人の大働きで、水
船から引上げた人間は五人、船頭の三吉と、野幫間のだいこの巴屋七平
は、それつ切り行方ゆくへ不知しれずになつてしまひました。

近所の船頭をかり集め、松明たいまつを振り照して川筋を捜しました

が、その晩は到頭解らず、翌る日の朝になつて、船頭三吉と、野幫間七平の死骸は、百本杭ぐひから淺ましい姿で引上げられました。

ところで、不思議なことに、呑む、打つ、買ふの三道樂に身をもちくづ持崩して、借金だらけな船頭三吉の死骸からは、腹巻の奥深く祕めた百兩の小判が現れ、野幫間七平の死骸には、背後はいごから突き刺した凄まじい傷が見付かつたのです。

「こんなわけだ、親分、行つて見て下さい。前代未聞の騒ぎぢやありませんか」

ガラツ八の八五郎は、得意の早耳で、これだけの事を聞込んで來たのでした。

「そいつは御免蒙ごめんかうむらう、向島ぢや縄張り違へだ」

錢形平次は相變らず引込み思案です。

「繩張りの事を言や、三輪の萬七親分だつて繩張り違ひでせう」

「それが何うした」

「いきなり川を渡つて、現場を散々荒し抜いた上、柳橋に渡つて、お蔭^{つた}を擧げて行きましたぜ」

「それが見込み違へえだといふのか」

と平次。

「お蔭は藝者家業^{かげふ}こそしてゐるが、親孝行で心掛の良い娘だ、人を殺すか、殺さねえか、親分」

「大層腹を立ててるやうだが、誰かに頼まれて來たんぢやあるまいな、八」

「へエ——」

「誰だか知らないが、門口かどぐちで赤いものがチラチラするやうだ、此處へ通すが宜い、——お靜」

「はい」

女房のお靜は心得て門口へ行つた様子ですが、何やら押問答おしもんだふの末、モジモジする娘を一人、手を取らぬばかりに伴れて來ました。

「お前さんは？」

平次も少し面喰めんくらひました。まだほんの十七八、身扮みなりは貧し氣な木綿物ですが、此界限かいわいでも、あまり見かけた事のない良い娘こです。

「ヘツ、ヘツ、——お薦の妹ですよ、親分」

ガラツ八は不意氣に五本指で小鬢こびんなどを搔かいて居ります。

「早くさう言や宜いのに、——なんと言ひなさるんだ」

「お絹さんてんだ、親分、——あつしの叔母さんの知合で」

ガラツ八はまだモヂモヂして居ります。

「お絹さんと言ふのかい、——一體どうしたといふんだ、皆んな話して見るが宜い。俺の力で及ぶことなら、何んとかして上げよう」

錢形平次が、斯かう言ふのは、全くよく／＼のことでした。それだけこのお絹といふ小娘は、好感の持てる娘だったのです。

油つ氣のない髪、白おしろい粉も紅も知らぬ皮膚ひふ、山のはひつた赤い

帶、木綿物の地味な單衣ひとへ、なに一つ取柄の無いやうですが、そのつくろはぬ身扮みなりにつゝんだ、健康さうな肉體と、内氣な純情とは、どんな人にでも、訴へずには措かなかつたでせう。

「姉を助けて下さい、親分さん」

「一體、どうしたのだ」

「姉は——たいこもち 幫間の七平を怨うらんで居ました。あの人がお袖さんに頼まれて、餘計な事を言ひ觸らしたばかりに、菊次郎さんと切れてしまつたんです」

「それで？」

「それで、七平を殺したのは、姉さんに違ひない——つて、三輪の親分が言ひます」

「フーム」

「それから、昨夜舟ゆうべの中で、みんな氣違ひみたいになつたのに、姉だけ一人、平氣でゐたのが怪しいんですつて」

「それだけの事なら、お前の姉さんを下手人げしゆにんにするわけにはゆくまい。外に何んか手掛りがあるだらう」

三輪の萬七の老らうくわい獺ねさが、それだけの證據でお蔭を縛らせる筈ありません。

「姉ちゃんねちゃんは怪我けがをしてゐたんです」

「――」

「手首を切つて、ひどく血が出てゐたんですつて」

「そんな事もあるだらう、――よし、俺が行つて覗いてやら

う。親孝行で評判の良いお蔭が、人など殺せる道理はない、——
八、一緒に行つて見るか」

「へエ——」

親分を引張り出したのは、自分の手柄だけではなかつたにしても、フエミニストの八五郎は、すつかり有頂天になつて、親分の草履ざうりなど揃そろへて居ります。

四

「おや、錢形の」

向島で沈んだ船を見て、百本杭ぐひへ死骸を見に行つた平次は、現

場でハタと三輪の萬七に逢つてしまひました。

「萬七兄哥、もう下手人の目星が付いたやうだな」

「今度は間違ひがねえつもりだ。女の怨みは恐ろしいな、錢形の、うら

——磯屋いそやの貫兵衛は江戸一番の醜男ぶをとこだが、あの弟分の菊次郎は、

また苦み走つた飛んだ良い男さ。お薦はあの男に捨てられたのを七平のせめだと思ひ込んでゐるんだ」

自分の手柄に脂やに下る萬七に案内されて、兎も角も、引取手もなく、筵むしろを掛けたまゝにしてある二人の死骸を見ました。

船頭の三吉は、稼業柄にもなく、水に落ちて死んだといふだけのことですが、野幫間のだいこの七平の死骸には、背中せなかから突いた傷が一つ、水に晒さらされて、凄まじい口を開いて居ります。

「あひくち匕首やかみそり剃刀ぢやねえ」

でばばうちやう

「出刃庖丁だよ、水船の中から拾つて番所に預けてある」

萬七は先に立ちました。

番所へ行つて見ると、船頭三吉の腹巻から百兩の小判と血ちあぶら脂の浮いた出刃庖丁と、それから、嚴重に繩を打つたまゝのお蔭が留め置かれて居ります。

水船から這ひ上がつて、半身ぐしよ濡れのまゝ縛られたのでせう、腰から下は生なま濕りのまゝ、折目も縫目ぬいめも崩れて、筵むしろの上にしよんぼり坐つたお蔭は、妙に平次の感傷をそゝります。

妹のお絹によく似た細ほそ面おもて、化粧崩れを直す由よしもありません

が、生れ乍らの美しさは、どんな汚きたな作りをしても、蔽おほふ由もな

かつたのでせう。うな垂れた緑の眉から、柔かい頬のあたりが霞^{かす}んで、言ひやうもない痛々しい姿です。

「お前は左^{ひだり}利きかい」

平次の最初の問ひは唐突^{たうとつ}でした。

「いえ」

僅かに顔を擧げるお蔭。

「傷は右手首のやうだが、——どうしてそんな怪我をしたんだ」

「自分の持った出刃庖丁で切つたのさ、解り切つたことぢやないか」

萬七は苦々しく遮^{さへぎ}ります。

「右手に持った出刃庖丁で、右手首を切る筈はない」

平次のさう言ふ言葉に力を得たものか、

「お燭^{かんばん}番の卯八^うさんが、碇^{いかりづな}綱を切つて投げた庖丁が當つたんです」

お薦は顔を擧げてはつきり言ふのでした。

「本人はあんな事を言ふがね」

と萬七。

「だが、三輪の兄哥。若い女の手で、七平を殺した上、船頭の三吉まで水の中へは投り込めないよ」

「何んの中毒か知らないが、船の中では皆んな半^{はん}狂^{きやう}亂^{らん}だつたさうだよ。目の昏^{くら}んだ人間なら、女一人の手でも、二人や三人始末出来ないことはあるまい」

萬七は頑ぐわんとしてお蔭に疑ひを釘付けにするのでした。

「お蔭——お前は今大變な事になつてゐるよ、——皆んな申上げて了つちやどうだ、隠し立てをして、萬一の事があると、母親や妹が、飛んだ歎きを見ることになるぜ」

「親分さん、私は、私は何んにも知りません」

平次の言葉の意味が解ると、お蔭はたゞさめ／＼と泣くのです。

「船の中で正氣だつたのは、磯屋とお爛かんぼん番の外には、お前一人だつたと言ふぢやないか。お前は何にか知つてゐるに違ひあるまい」

「——」

「お前の妹のお絹が、先刻俺の家へ來たよ。母親の歎なげきを見ては

居られないから、何とか、姉を助けてくれ——と言つて」

「親分さん」

お薦は縛^{しば}られたまゝ、ガバと泣き伏しました。

「言ふが宜い、お前は何にか知つてゐるに違ひない」

「——」

お薦は黙つて頭を振りました。

「ね、錢形の、この通りだ」

萬七は我が意を得たる顔です。

五

「親分さん方、——磯屋いそやの爺ぢいやが、申上げ度いことがあるさうですよ」

下つ引が一人、うさんさうに鼻を持つて來ました。

「卯八うか、呼出すつもりだつた。丁度宜い、此處へつれて來い」
「へエ——」

間もなく、下つ引に案内されて、恐るゝ膝小僧ひざこぞうを揃へたのは、昨夜ゆうべのお爛番——磯屋いそやの庭掃にははき卯八うでした。五十六七——一寸見は六十以上にも見えますが、長い間戸外生活と勞働きたで鍛へて、鐵のやうに頑丈なところがあります。

「何んだ、卯八」

萬七は事件が厄介らしくなる豫感で、少しばかり苦い顔を見せ

ました。

「お薦さんが縛られたと聞いて、びつくりして飛んで参りました。お薦さんは、始終私か旦那の側に居りました。人を殺すなんて、飛んでもない」

「それぢや、誰が七平や三吉を殺したんだ」

萬七は乗出します。

「私ですよ、親分さん、——この卯八うですよ」

「何？」

「三吉を川へ抛はり込んだのは、この私に違はひございません」

「何んだと？」

「船に仕掛けを拵こしらへて、中流で沈めにかゝつたのは、あの三吉で

ございますよ。私は船底の栓せんを抜かせまいと思つて一生懸命組打をしました。が、何んと言つても年のせいで、三吉を川へ抛り込んだ時は、もう栓が抜かれて、水が瀧のやうに入つて居ました。仕方が無いから、碇いかりづな綱を切つて、滅茶々に岸へ漕こぎ寄せました」

卯八の言葉は豫想外でした。が、これだけ筋が立つてゐると、最早疑ふ餘地ありません。

「三吉は何んだつてそんな事をしたんだ」

平次もこの恐ろしい企くはだての意味は讀みかねました。

「船の中の人間を皆殺しにするつもりだつたかも知りません。碇綱で川の真ん中に止めた船が沈めば、あんなに酔つて居ちや、

助かるのが不思議です」

「皆んな氣違ひ染みた騒ぎをして居た——とお薦^{つた}も言ふが、何んか變なものでも吞ませたんぢやないか」

「——」

「土手^{どて}に這ひ上ると、ケロリとしてゐたが、船の中に居る時のことは、何んにも知らないと言ふぞ」

萬七は疊みかけました。

「——」

卯八は頑固^{がんこ}に口をつぐみます。

「それぢや、七平を殺したのは誰だ」
と平次。

「それはわかりません」

「お前ぢや無いと言ふのか」

「七平は舳^{みよし}に居りました。私やお薦さんは艫^{とも}に居りました」

「出刃はお前が抛^{はふ}つて、お薦の手に當つたさうぢやないか。その出刃で七平が殺されて居るんだぜ」

平次はその時の情景を想像して居る様子です。

「――」

「七平の側には誰と誰が居たんだ」

「おりんさんと、清五郎さんと、菊次郎さんと――」

「主人の貫兵衛は？」

「旦那様と、お袖さんは、私と七平さんの間に居りましたよ」

「フーム」

今度は平次が黙り込んでしまひました。

六

「八、昨夜船に乗つてゐた人間を、片つ端から調べ上げてくれ」
「へエ——」

「男も、女も、どんなつまらない事でも聞き漏しちやならねえ。」

七平と懇意こんいなのや、七平に怨や恩のあるのは、とりわけ大事だよ」
「そんな事ならわけはねえ」

「急ぐんだよ、八」

「へエ」

「それから磯屋の貫兵衛も、身しんしやう上から女出入りまで、根こそぎ調べて来い、こいつは一番大事だ」

「心得た」

「一人で手に負おへなかつたら、下つ引を二三人狩り出せ。明日の朝までだよ、八」

平次の言葉を半分聞いて、八五郎は飛出しました。それから半日。

「親分」

八五郎はもう歸つて來たのです。

「どうした、八」

「いろ／＼の事が判りましたよ」

「話してみな」

「お薦^{つた}が七平の細工^{さいく}で、菊次郎と割かれたことは――」

「それはもう判つてゐる」

「菊次郎は飛んだ野郎で、金と女を取込むことにかけては大變な名人ですよ」

「――」

「お薦と手を切つて、近頃はお袖に夢中になつて居ますよ」

「フーム」

「兄貴の磯屋の身代を、どれだけくすねたか解りやしません。近頃磯屋の身上^{ゆが}が歪^{ゆが}んで、伽羅大盡^{きやら}の貫兵衛は首も廻らないのに、

菊次郎だけは、大ホクホクだ」

「磯屋がそんなに悪いのか」

「この盆ぼんは越せまいといふ話ですよ。何しろ十年越の駄々羅遊だざらびだ。どんなに身上があつたつてたまつたものぢやない。それに、

義弟の菊次郎を始め、巴屋ともゑや七平、江崎屋清五郎などは、滅茶滅茶おだに煽つかてて費はせて、そのかすりを取ることにばかり考へて居るんだ」

「清五郎と七平の暮し向はどうだ」

のだいこ

「野幫間を家業のやうにして居るくせに近頃は大變な景氣だ。こ
とに清五郎なんか、地所を買つたり、家を建てたり、おりんの身
請けをするといふ話もありますよ」

「よし／＼、それで大分判つたやうだ。ところで、八。横山町の町役人に會つて、明日の辰刻前、磯屋の主人貫兵衛が、御手當になる筈だ、萬事抜かりのないやうに仕度をして置け——と斯う言つて置いてくれ」

「それは、本當ですか、親分」

「本當とも、笹野の旦那には、あとでさう言つて置く、——こいつは大變な捕物だ。抜かつちやならねえ」

「あんまり早く町役人に言つて置くと、磯屋の耳に入りますよ」

「それで宜いんだよ」

「へエ——」

「おツと待つた、八」

「今晚、少し仕事がある。横山町の自身番へ潜り込んで、俺の行くのを待つてくれ」

「へエ——」

八五郎は何が何やら解らずに飛んで行きます。

それから二た刻ばかり、江戸の街々もすつかり寢鎮まつた頃、

平次は横山町の自身番を覗きました。

「八」

「あツ、親分」

「静かについて来い」

二人はそれつきり黙りこくつて、城廓のやうな磯屋の裏口へ忍び寄りました。

「何をやらかすんで、親分」

「ちよいと、泥棒の眞似をするんだ」

「へエ——」

「どんな事が始まつても、驚くなよ、八」

「——」

平次の調子の物々しさに、八五郎もツイ胴^{どう}ぶるひが出るのでした。

「この堀^{へい}へ飛付けるだらう」

「大丈夫ですか、親分は」

「大丈夫だとも」

二人は裏口の側の天水桶^{てんすゐをけ}を踏^{ふみ}臺^{だい}にして、あまり苦勞もせず

に塀を乗り越えました。

「どうするんで、親分」

「シツ」

「驚いたなア」

「驚くのはこれからだよ」

磯屋の裏をグルリと一と廻り、平次は家の中へ忍び込めさうな場所を捜す様子^{さが}でしたが、伽羅大盡と言はれた構へだけに、さすがに忍び込む場所ありません。

「親分、あれは？」

「シツ」

平次は八五郎を突飛ばすやうに、あわてて物蔭^{ものかげ}に身を潜め^{ひそ}ま

した。裏口が静かに開いて、眞つ黒なものが、そろりと外へ出たのです。

「――」

二人は呼吸を殺して見詰めました。

眞つ黒な人間は、暫く外の様子を見て居る様子でしたが、誰も見とがめる者が無いと判ると、引つ返して家の中から手燭てしよくを持つて來ました。

磯屋いそやの主人、伽羅大盡きやらの貫兵衛です。

貫兵衛は平次と八五郎には氣が付かなかつたものか、その前を通り抜けて、物置の方へ足音を忍ばせます。

「來い」

平次は八五郎を小手招ぎこてまね乍ら、靜かにその後をつけました。

やがて物置から、プーンとキナ臭い匂ひ、パチパチと物のはぜる音。

「八、大變だ。あの火を消せ」

「應おツ」

二人が一團になつて飛込むと、磯屋貫兵衛は、手燭の火を、物置の中のガラクタに移して居る最中だつたのです。

「野郎ツ」

遮しや二無二飛む込むガラツ八。

「あツ」

燃え草の火の中に、貫兵衛と組んだまゝ轉がり込みました。咄と

嗟つぎの間に平次は、物置の側にある井戸に飛突くと、幸ひ其處にあつた用心水を一杯、燃え上がつたばかりの焰ほのほの上へ遠慮會釋もなく、ドツと浴びせたのです。

「わツ、ブルブル」

火は消えました。が、ガラツ八と貫兵衛は、取つ組んだまゝツブ濡れになつて、物置の口へ轉がり出ます。

「何んといふ馬鹿なことをするんだ、御府内ごふないの火付けは、火焙ひあぶりだぞ」

平次はそれを闇の中に迎へて叱咤しつたします。

「相濟みません」

相手の素性すじやうも判りませんが、貫兵衛は威壓ゐあつされて、思はず大

地に崩くづれました。

「幸ひ誰も氣が付かない様子だ、——酒へ毒を入れたり、物置へ火をつけたり、一體これはどうした事だ」

「——」

「俺は神田の平次だ、話して見ちやどうだ」

平次の聲は威壓から哀あい憐れんに變つて居りました。

「錢形の親分——良い方に見付かりました。皆んな申上げます。この私が、今晚死ななければならぬわけ——」

七

物置の前から奥の一と間に案内されて、平次とガラツ八は、磯屋貫兵衛の不思議な懺悔さんげばなし話に耳を傾かたむけました。

「聽いて下さい、親分。この世の中に、私ほど幸しあはせに生れて、私ほど不幸せになつた者があるでせうか」

磯屋貫兵衛の話は斯うでした。貫兵衛が父の跡を繼いだのは十年前、丁度二十五の歳、金持のお坊ちやんに育つて、阿諛あゆと諂てんね佞いに取巻かれ、人を見下みくだしてばかり來た貫兵衛は、自分の世帯

になつて、世の中に正面から打つかつた時、初めて、自分の才能ようばう容貌ようばう、魅力みりよく——等に對する、恐ろしい幻滅を感じさせられたのです。

それまで、自分ほど賢い者は、江戸中にもあるまいと思つたの

が、我儘な坊ちやんの言ひ募る言葉に屈從する人達の姿であり、自分ほど立派な男はあるまいと信じさせたのは、おべつかを忠義と心得た、卑怯な人達のお世辭を、鏡と沒交渉に信じてゐたに過ぎないことを、つく／＼と思ひ當らせられる時が來たのでした。

貫兵衛は、恐ろしい失望と自棄に、氣違ひ染みた心持になりましたが、間もなく、何萬兩といふ大身代が自分の自由になつたことと、その何萬兩を散じさへすれば、お坊ちやん時代の昔の夢を、苦もなく再現することの出来ることに、氣が付いたのです。

あらゆるお世辭、——齒の浮くやうな阿諛を、法外な金で買つて、貫兵衛は溜飲を下げました。色街の女達も、百人が九十人

まで、小判をバラ撒きさへすれば、助六のやうに自分を大事にしてくれます。

行くところ、煙管きせるの雨は降りました。家へ歸ると、女達の手紙を、使ひ屋が何十本となく持つて來てくれました。やがて、金の力の宏大なのに陶醉たうすゐして、貫兵衛はもう一度、それが自分に備そなはつた才能、徳望のやうに思ひ込んでしまつたのです。

それから十年の間、貫兵衛はあらゆる狂態をし盡しました。女房を迎へる暇ひまもないやうな、忙しい遊蕩せはいうたう——そんな出鱈目な遊びの揚句は、世間並みな最後の幕へ押し流されて來たのです。

手つ取早く言へば、磯屋にはもう一兩の金も無くなつて居たのです。家も、屋敷も、商品も、二重にも三重にも抵當に入つて、

この盆には、素すっぱだか裸はふで抛り出されるか、首くでも縊くるより外に、
貫兵衛の行く場所は無かつたのでした。

「さうなると、女共は皆んな私から離れてしまひました。お薦つたも、
おりんも、お紋も、お袖も——、それから私を十年越し喰ひ物に
して居た遊び仲間も、蔭へ廻つて私の悪口を言ふやうになりました。
た。何千兩となく取込んだ義弟おとうとの菊次郎も、巴屋ともゑやの七平も、
江崎屋の清五郎も、私の顔を見て、近頃はもう昔のやうにお世辭
笑ひをしなくなつたばかりでなく、わざと私に聞えるやうに、私
の悪口をさへ言ふやうになつたのです」

貫兵衛の話の馬鹿々々しさ、ガラツ八の八五郎さへ、我慢がな
り兼ねて時々膝を叩きますが、錢形平次は世にも神妙に構へて、

「それから」

静かに次を促うながします。

「私は一期ごの思ひ出に皆んなを馬鹿にしてやらうと思ひました。昔金に飽あかして手打入れた、笑ひ茸わらだけの粉を、和蘭渡りおらんだわたの赤酒に入れて、皆んなに一杯づつ呑ませ、あらん限りの馬鹿な顔をさせて見るつもりだつたのです」

話は次第にその晩の筋になつて來ます。

「涼み船を出して、首尾よく笑ひ茸の酒を呑ませ、皆んなの、あらゆる馬鹿な姿を眺めました。それがせめてもの——翌る日は死んで行く私の腹癒はらいせだつたのです。その晩歸ると、奉公人に皆んな暇を出し、この家に火をつけて、私は首でも縊くるつもりでした。

——それが、船を沈め^{しづ}られたり、七平が殺されたり、あんな思ひも寄らぬ騒ぎになつてしまつたのです。私の死ぬのは、そのお蔭で一晩遅れました——尤^もも」

「——」

「尤も、卯八だけは私の心持をようく知つて居りました。あればかりは、私におべつかも使はず、お世辭らしい事も言ひませんが、こんな落目になつても、一生懸命、私を庇^{かば}つてくれました。——笑ひ茸^{たぐら}の企みなども、最初はたつて止めましたが、命に別條のないことだからと説きふせられて、私に一世一代の溜飲^{りういん}を下げさせたのです」

「船を沈めさせたのは誰の指圖だ」

平次はそれを知り度かつたのです。

「それは知りません。——私は自分の命さへ捨てるつもりでした。今更嘘うそも偽りいつはもありません。船頭の三吉に、船を沈めることを言ひ付けたのだけは、この私ぢやない」

「すると？」

「第一、私にはもう、百兩といふ小判がありませんよ」

貫兵衛はさう言つて淋しく笑ふのです。三吉の死體の腹巻にあつた金の事でせう。

八

「親分、驚いたね」

ガラツ八は、黙々として横山町から歸る平次に聲を掛けました。磯屋貫兵衛を町役人に預けて、さてこれから何うしようも無く、家路を辿たどつて居たのです。

「俺も驚いたよ。七平を殺したのは、お蔭や貫兵衛でない事は確たしかだ」

「三吉に言ひ付けて、船を沈めさせた奴ぢやありませんか」

「えらいツ、八、其處へ何んだつて氣が付かなかつたんだ。あの晩、赤酒を呑む振りをして呑まなかつた奴と、泳およぎのうまい奴を調べて来い、——今度は間違ひ無いぞ」

「そんな事ならわけはありませんや」

「何處へ行つて聞くつもりだ」

「船宿を軒並叩き起して——」

「それも宜いが、卯八とお蔭に聞くのが早いぜ」

「心得た」

ガラツ八は闇の中に飛びます。翌る朝ガラツ八が、その報告を持つて來たのは、まだ薄暗いうちでした。

「親分、驚いたの何んの」

「どうした、八」

「あの中で泳げないのは、貫兵衛と爺やの卯八だけですよ」

「何？」

「死んだ七平なんぞと來た日にや、河童かつぱ見たいなもので」

「菊次郎と清五郎は？」

「二人ともよく泳ぐさうですよ、——もつと尤も女共は皆んな徳利だ、とつくり少しでも泳げさうなのは、橋場はしばで育つたお袖位のもので」

「すると——面白いことになるぜ。七平は船が沈んでも死に相もないから刺さされたといふわけだらう」

「其處ですよ、親分」

ガラツ八は大きな聲を出します。

「ところで、赤酒を呑まないのは、誰と誰だ」

「そいつが大笑ひで、親分」

ガラツ八はクスリクスリと笑ひます。

「何が可笑をかしい」

「あの伽羅大盡きやらだいじんの貧乏大盡が何處迄お目出度いか解らない」

「どうしたんだ」

「赤酒の中に、何んか仕掛けがあると知つて、たつた一人も呑んだ奴が無いと聞いたらどうします」

「本當か、それは、八？」

この情報には、さすがの平次も驚きました。

「どうかしたら、殺された七平位は呑んだかも知れないが、菊次郎も清五郎も、おりんも、お袖も呑んぢや居ません。皆んな川に捨てたり、手拭てぬぐひにしめしたりしたさうで——これは最初から素し面らふだつたお蔭と卯八が見届けてゐますが。尤もつとも三吉は確たしかに呑んださうで」

「成程な」

「笑ひ茸^{わらだけ}なんて、そんなものを吞ませて、萬一間違ひがあつては

と、人の良い卯八がそつと菊次郎に耳打をしたんです」

「そいつは大笑ひだ、——吞まない毒酒を吞んだ振りをして、七

人揃^{そろ}つて氣違ひ踊りと馬鹿笑ひをするとはふざけたものだな、伽^き

羅大盡^{やらだいじん}の馬鹿納めには、なる程そいつは良い狂^{きやうげん}言^{げん}だ」

「ところで下手^{げしゅにん}人は誰でせう、親分」

「解つて居るぢやないか」

「へエ？」

「皆んなだよ」

平次は八五郎と一緒に先づ、磯屋の近所に住んで居る菊次郎を

襲おそひました。猛烈に暴れるのを縛つて、續いて江崎屋の清五郎を、それから——年増藝者のおりんとお袖とを、四人數珠じゆず繋ぎにして、その朝のうちに送つてしまつたのです。

×

×

×

「さア判らねえ、下手人は四人ですかい、親分」

「その通りだよ。菊次郎が頭領かしらになつて、この十年の間に、磯屋

の身代を滅茶々にし、その半分位は自分達が取込んで居たんだ」

「そいつは世間でも知つて居ますよ」

「いよく磯屋が身代限りといふことになると、お白洲しらすへ出るか

ら、自分達の悪事が皆んな知れる、——涼み船で笑ひ草を吞ませ

るといふ話を卯八から聽いて、菊次郎と清五郎は、其裏を搔く相

談をしたんだ。船頭の三吉に百兩の大金をやつて、河の眞ん中で船を沈めさせ、貫兵衛とお薦と卯八を、溺れさせ、自分達だけ助かるつもりだったのが、其場になつて七平が不承知を言ひ出して、仲間割れが出来て一寸困つたところへ、船頭の三吉は本當に毒酒を呑んで、卯八のやうな年寄に川へ抛り込まれた」

「へエ——」

「卯八の抛つた出刃庖丁でばうちやうを拾つたのは、一番近いところに居た

お袖だ。そこでお袖の手から菊次郎が受取り、これを清五郎に渡した。

清五郎がそいつで舳みよしに後ろ向になつて居る七平を突き、川の中へ

落したんだらう。唯川の中へ突落した位ぢや、泳およぎのうまい七平は

死なない——七平に寝返りを打たれちや菊次郎も清五郎も首が危

ない」

「なアる——」

「そんな事をして居るうちに船は岸に着いた。人立ちがして來たから、その上の細工は出来なかつたのだらう」

さう説明されて見ると疑ふ餘地ありません。四人——七平を加へて五人でやつた細工さいくなら、成程手際よく運びもするでせうが、最後きはの際に、七平の裏切と卯八の忠義で、惡者共の企たくらみが喰ひ違つてしまつたのです。

「悪い奴等ぢやありませんか。親分」

「人間の屑くづだよ、——俺の立てた筋すぢは先づ間違ひはあるまいと思ふ。このお調べは面白いぜ、八」

「へエ——」

「氣の毒なのは磯屋の貫兵衛だ、——が、自業自得じごふじとくといふものさ、
——それよりも可哀想なのはお蔭つただ」

平次はつく／＼さう言ふのでした。

青空文庫情報

底本：「錢形平次捕物全集第十六巻 笑ひ茸」同光社磯部書房

1953（昭和28）年9月28日発行

初出：「オール讀物」文藝春秋社

1939（昭和14）年8月号

※題名「錢形平次捕物控」は、底本にはありませんが、一般に認識されている題名として、補いました。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：門田裕志

2014年1月18日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

錢形平次捕物控

笑ひ茸

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 野村胡堂

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>